「読書百遍義自ら見る」は正しいか

田　中　　裕

キーワード：読書百遍、朗読、方法序説

要　約

「読書百遍義自ら見る」という言葉が正しいかどうかを短大生活学科の新入生28名対象にデカルトの方法序説を30回読むことによって確かめた。一段落読む毎に５段階評価の理解と読みのスムーズ度とコメントを記録してもらった。正しいというのが結論である。

1　イントロダクション

「読書百遍義自ら見る」という言葉がある。これは三国志魏志王粛伝注にでてくる言葉でどんなに難しい書でも何度もくりかえして読めば、意味が自然に明らかになるという意味である。熟読の必要を説いた言葉と言われているがこれはどの程度正しいであろうか。個人的な経験では確かに何度も読むと意味がわかってくることがよくある。では何度ぐらいどのように読めばよいのであろうか。本当に難しい本でも解るのであろうか。読書経験の少ない人にでもあてはまるのであろうか。もしこの言葉が正ければ、読みに時間さえかければ理解が進むことになる。自然に明らかになると言う言葉には特別なこと、無理なことをしなくともよいというニュアンスが感じられる。忍耐はいるがある意味では楽な方法である。この小論はこの言葉が正しいか否かを定量的に調べた報告である。

私は短大の生活学科に所属している。1991年に新入生を対象にした必修の入門演習が始まった。この演習は本を読むことを学ぶことを目的とした演習である。内容的には、なるべく担当教員の専門にこだわらないことになった。私の専門は宇宙物理である。本を読む方法ということで思い出した言葉が「読書百遍義自ら見る」という言葉である。経験からある程度正しいという認識をもっていたので、このことを教えることにした。

さて重要なことは本の選定である。本当の意味で重要なことを含んでいる書物でないと多くの時間を割くのであるからもったいない。また、これを読んだと自慢できるような本であることが重要である。何故なら難しく理解できない本を何度も読む気にさせるためには、この本が価値ある本であることを力説しなければならないからである。本学科に入学してくる学生のほとんどは一生読まないであろう本であることも重要である。すでに読んだ本であると、その学生にとって演習の意義

が半減することになる。また教育というのはめったに体験することができないことを体験することも重要なので今後読むことのない本と考えた。またこの演習の目的からして簡単な本ではいけない。少なくとも本をほとんど読まない本学学生にとって、かなり難しい本であることが必要である。難しくないと「読書百遍…」を試すことにはならないからである。また時間の制約があるので大部ではないことも必要である。このような条件を考え、何らかの古典を読むことにした。古代ギリシアや近代の古典とよばれる本の中から、このようなことを考慮して選んだのがデカルトの方法序説である。

方法序説は「徹底的な疑いを通じて確実な真理に迫ろうとするデカルトの体験と思索が集約された近代精神の確立を告げる画期的な作品」であり、読むに十分価値ある本である。量も文庫本で100ページ足らずである。10年ほどこの授業を行ったが読んだことがあるものはいなかった。また彼女ら（現在は男女共学であるがこの演習を行った当時は女子短大であった。）の読書傾向から見て今後も読むことはないと言える著作である。難易度も十分ある。実際に１回目の読みではほとんどの学生がまったく理解できないと述べている。なお方法序説は最初は岩波新書の落合太郎訳を使ったが途中から谷川多佳子の新訳を使った。今回の分析では落合太郎訳を使った時の記録をもとにしている。

2　読書の方法

2.1　読む回数

さて読む本はきまったが演習でこの本をどのように読んでいくかを定めなければならない。授業の回数は年度によって異なるが多くて12回程度である。この回数では方法序説を実際に100回読むことは不可能である。実際に100回読むことができなくともある程度読めば「読書百遍義自ら見る」が確かなことか否かは見当がつくと思った。そこで回数は30回を目標とした。ただし方法序説を全部読むことはこれでも時間的に無理がある。方法序説は全部で６部から成り立っている。そこで１部、２部、３部、及び４部の２節までを繰り返し読むことにした。４部の１節には有名な言葉「私は考える、それ故に私はある」という言葉がある。このようにしても実際に授業の時間で読めるのは10回程度である。そこで授業で不足する分は宿題として読んでもらった。

2.2　声を出して読む

さて難しく意味の解らない本を読んでいると、たいていは眠くなり集中がとぎれてくる。集中しようとすると活字には目がいくが、難しいために脳は何も反応せず、一方集中するから他のことに頭は働かない、結果的に頭は何も働かなくなり、眠くなるのである。これでは読んだのか否かが分からないことになる。そこで目だけで読むのではなく朗読することにした。学生には意味を考えようとしなくともよい、きちんと声をだして読み、滑らかに読めるようになることを目標に読むように指導した。無理に考えなくともよいことはかなり強調した。「自ら見る」に期待したこともあるが、頭にある種の考える骨格ができないと無理に考えても仕方がないと考えたのである。また読む学生の立場で言うと意味を考えよと強調されると意味が解らないことにより、否定的気分になるこ

とを恐れたこともある。

目で読む場合に使うのは目だけだが、「朗読」は目と声帯と耳の３つを使うことになる。人間は活字を使いだしたのはたかだかこの５千年程度のことであるが、音声を使った情報のやりとりは動物の時代から行ってきたことである。したがって情報を獲得するのに耳を使うことは可成り意味のあることに違いないと考えた。したがって常に声を出すことを強調した。したがってここで行ったことは読書百遍ではなく正確に述べると朗読百遍である。演習の時間は私も含めて全員で朗読する時間であった。他の先生からは意味も解らず声をだしているので読経の時間と冷やかされた。

2.3　本の内容に関する説明

何度も読んだらわかるようになるということを体験するのが目的の演習なので内容の説明はまったくしなかった。ただし滑らかに声を出して読めるようになることが当面の目的なので字句の読みについては説明した。字句の意味については説明していない。辞書で意味を調べる学生もいたが多くは調べていないようであった。

2.4　繰り返しの文章量

本を読む場合の繰り返しの文章量について述べる。本を読む場合何度も読むとはどういうふうに行うことであろうか。例えば解らない文がでてくる場合集中してそこを何度も読む場合があるが、理解できる部分が多い場合はそのような方法でも有効であるが、難しい本の場合このような方法では何度読んでも意味が解ることにはならない。この演習では部単位で読んでもらった。ただし１部を30回読んで次に２部を30回という方法ではない。１部６回程度読んだら２部に入り、１部と２部を何度もよんでいく、２部が６回程度読んだら３部も読んでいくという方法である。方法序説は１部10ページ、２部12ページ、３部10ページ、４部11ページである。１ページ731字である。400字づめ原稿用紙にして18枚程度を一挙に読んでいったことになる。経験上長い文章を一挙に読んで行く方がよいと思うがどの程度が適当かは、はっきりはしていない。なおこのことは４で議論する。

2.5　記録

何度も読むと理解ができるようになることを実体験してもらうのがこの演習の目的であるので、読んだ記録を丹念にとってもらった。日時、読みにようした時間、読みのなめらかさ、理解、及びコメントである。読みのなめらかさは、たどたどしくしか読めなかったを１、非常に滑らかに読めたを５として５段階で評価してもらった。また理解に関しても同様に、まったく理解できなかった１、非常よく理解できたを５として５段階で評価してもらった。なお読む単位は部であったが、評価に関しては、これでは粗すぎるので段落ごとにした。第１部は15段落、２部は13段落、３部は７段落、４部は最初の２段落を評価の対象とした。例として、ある学生の第三部を13回目に読んだ時

表１　読書記録の例

第３部　13回目　７月２日９時15－39分

段落	1	2	3	4	5	6	7
読み	4	4	5	5	4	5	5
理解	3	2	3	3	2	2	3

コメント　だいぶ理解ができるようになってきたと思う。

の記録を表１に示した。また30回読み終わったあとに、ワープロ３枚以上（400字で８枚程度）の感想文を書いてもらった。この感想文より学生の主観ではない理解度をある程度知ることができる。

3　結　　果

3.1　全平均の結果

今回の報告は1993年の演習の記録をもとにする。93年度の演習の参加者は28名である。このうち30回分のデータがそろっている19名に関しての結果をまとめている。最初に示すのは理解と読みの全平均であり、理解は次の式で与えられる。

$$\text{理解全平均（}i\text{回目）} = \frac{\sum_{j、k} \text{理解（}i\text{回目、学生}j\text{、段落k）}}{\sum_{j、k}}$$

読みの全平均も同等の式で求める。ここで回数は１から30、学生は19名、段落は37である。この結果を示したのが図１である。横軸に読んだ回数、縦軸に理解と読みの全平均を示している。ここから一目でわかるのは、最初ほとんど理解できなくとも、回数を追うごとに理解は高まっていることである。30回まで理解の向上はとまっていない。「読書百遍義自ら見るは」学生の主観としては正しいようである。読みとの強い相関も見られる。

この演習では「理解」よりもスムーズに読めるようになることを力説した、読みの向上とともに理解も進歩している。理解と読みの間に強い相関はあるが、グラフの傾きの傾向は少し異なっている。読みの向上は最初が速く途中で中だるみが見られるが、それに比して理解は比較的単調にあがっている。読みと理解の関係については3.4で詳しく述べる。

さてこれらの図を見てわかることは理解や読みの値が回数とともに全平均にもかかわらずかなり振動していることである。増加の傾向は見られても単調ではない。この理由はいくつか考えられる。学生には段落を読み終えるごとにコメントを書いてもらっているが、その中に「集中力が無く、眠くなってよく読めなかった」というコメントがかなりある。この場合評価は確実に悪くなる。だから全体としては向上していてもその時の注意力によりかなり変動するのである。もう一つの理由として「今まで分かったつもりだったが、また分からなくなってきた」というコメントもある。これは理解に関して主観で答えてもらっているから、

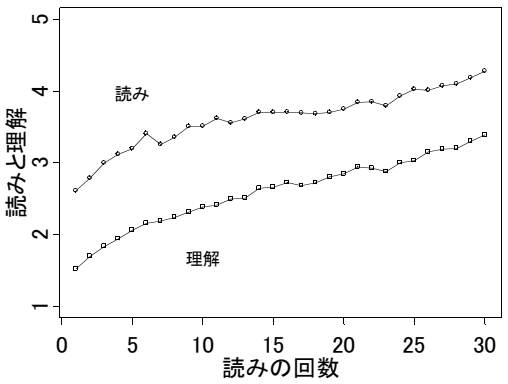

図１　読みと理解（全平均）

このようなことは当然おこることが理解できる。認識が進み新たに解らなくなることはよくあることである。

23回目付近で少しへこみが見られる、これは日程の都合上３週間ほど読みから遠ざかっていた学生がかなりおり、その場合平均値が下がってしまう。休むとかなり落ちるが、再び読み出すとその回復は早い。

最後の５回ほどでよい進歩が見られるがもう終わりに近づき、がんばろうという気持ちが強くなっていることが理由かもしれない。他の理由も考えられるが詳しくは４で述べる。

3.2　個人別の学習曲線

次に個人毎の結果について示す。図２－４は３つのグループに分けて個人の理解の進歩を示したものである。１つの線は１人の学生の理解の変化を示す。グループは30回目の理解度によって分けた。グループＡは４以上、グループＢは３から４まで、グループＣは３未満である。各グループのまとめを表２に示す。

表２　グループ毎の理解の平均

グループ	人数	１回目	５回目	10回目	20回目	30回目
A	6名	1.22	1.98	2.24	3.10	4.24
B	7名	1.76	2.31	2.79	3.28	3.47
C	6名	1.28	1.57	1.90	2.11	2.23
ALL	19名	1.44	1.97	2.34	2.86	3.37

グループＡ　最終的に良い理解を示したグループＡが最初の１回目でも理解が良いということはない。グループＡの１回目の理解の平均は1.22であり、４つのグループでは一番理解が悪くなっている。まったく解らないというに等しい。Ａグループの平均値がトップになるのは22回目である。Ａグループには10回目までは殆ど理解できなく、その後急速に理解を伸ばしていく２名がおり、その影響が強い。Ｂグループの人が頭打ちの傾向が見られるのに対してＡグループのメンバーは上昇を続ける。この点が大きく違うようである。何故このような差がでるのであろうか。記録のコメントから推定できることは。Ａグループのメンバーはかなり真面目に読み、工夫をしていることである。例えばｋさんは10回目くらいまでは全然理解できず。その後急速に理解を伸ばした学生である。彼女は読みの記録のコメントとして「すばやく読んだ。」「少しスピードを落として。流暢に読むようにした。」「きれいに読むようにこころがけた。」「なるべく内容のことを考えて見ました。」とか毎回いろいろ工夫しながら読んでいる。そのｋさんにしても「読んでも、頭に入らない疲れる。」「声を出すのを途中でやめていた。」「ねむたくて声を

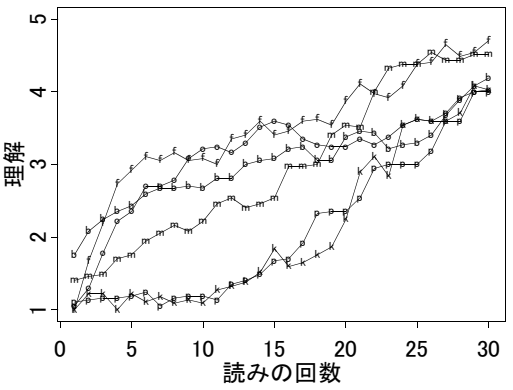

図２　学生毎の理解の変化（グループＡ）

出すのがしんどい。」「少しでもちがうことを考えるとだめだ。」等述べている。こんな状態で努力を続けていくのは難しい。理解に関しては15回目ぐらいまでは「全くわからない。」「長くてしんどい。内容はさっぱり。」「何回読んでもわけがわかりません。」等のコメントが並ぶ。しかし15回を過ぎたあたりから「なんとなくわかりかけたような気がする。」「少しずつわかるようになってきたかもしれない。」「きのうは少し理解できたと思っていても、今日読んでみるとなんかわからないところがあった。」「これだけ回数を読んでくると読むときはおちつきがでてくるというか読みやすくなってきた。」等の言葉が続く。25回目ごろには「内容もわかってきたし、スラスラ読めるようになってきたしうれしい!!!」「回数を重ねると理解できるものなのか…」等の言葉がでてくる。しかし一方「さっきまでわかってたつもりだったけどまたなんとなくわからない。」という当然と思えるコメントも見られる。最後は「これが第一部最後だ。はじめはわけわからんかったけど今となると“ふんふん”でかんじだ。」。4部は比較的難しい文章だが28回目で「じっくり読んでみた。わかっているようだ。」と述べている。しかし29回目では「すばやく読んでみた。すばやく読むとやはり内容が…」と述べている。kさんの例は典型的に真面目に工夫しながらとりくみ解るようになった例である。

kさんと同じような学習曲線を示したpさんの場合も意欲が見られる。「もう5回も同じのを読んでいるのに一向に理解できない。」「読書がきらいになりそう。」「半分寝ていた。」等の言葉が続くが、途中で「30回目は5にする。」等の言葉が見られ意欲を感じる。彼女は感想文の中で「一度二度読んだだけでは、全く理解できなかった。しかし10回20回同じ文章を読むうち、解らないなりに理解？したつもりです。」と述べている。Aグループの中で最終理解の一番よかったFさんは感想文の中で「この本の読み始めは何が書いてあるか解らない状態でした。そして読み慣れていくうちにただ表面的な部分を見て理解したつもりになり、同時にこんなことが書かれていてもだまされないと言うような気持ちも含めながら読んでいました。しかし、どの文章も、いつのころからかはわからないけれども、そういう気持ちはなくなっていたのです。」と述べている。何度も読むということは理解の質も高めていくようだ。Fさんの場合は最初の5回で急速な進歩を示している。率で述べると30回までの進歩の52%を5回までで達成している。他のグループを含め5回目の達成率が一番高かった学生は54%である。このことは難しい文書の場合少なくとも5回以上読まないと半分も理解できないことを示している。数回読んであきらめのはもったいないことである。

グループB　グループBは最終的理解度が2番目のグループである。その特徴は1回目の平均値は比較的高いことと、5から10回目ぐらいまでは進歩するが、15回目以後はなだらかなことである。そうはいっても最終の理解値3.47はかなりよい理解である。普通と良く理解できたの間であるから、方法序説ということを考慮すると充分なのかもしれない。感想文を見てもかなりよく理解している人も多い。少なくとも好きな文章はたくさんでてくるようで、自分なりの感想、あるいはデカルトへの疑問を述べている学生もいる。特に「真理はただ1つ」というデカルトの意見に対して、いろいろと反論を述べている人がいる。だからこのグループでも何度も読んだ結果がでていると考える

ことができる。

点数は学生が判断した主観的理解であるからその数字の大小はそれほど比較する意味はないかもしれない。しかしながら主観としても15回以後は進歩がそれほど見られないのは何故であろうか。これははっきり言ってよくわからない。グループBのコメントを見ると15回以後の熱意をそれほど強くは感じられないものが多い。まずコメントの量がそれほど多くなく、読みの工夫もそれほどは感じられない。しかしそれが感じられるという程度である。ただし意欲が理解と強い関係があることは確かである。毎回の理解の点数が振動しているが、これは集中力の差によることが多いと思える。

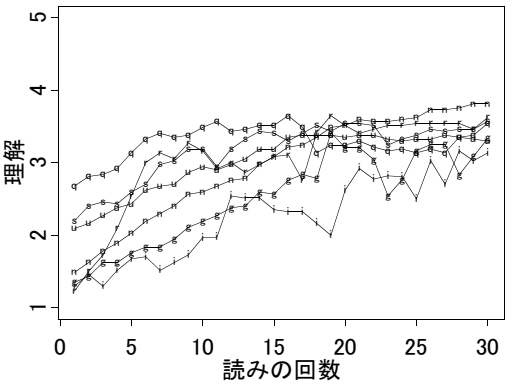

図３　学生毎の理解（グループB）

グループＣ　グループＣは最終の理解が３点に達していないグループである。このグループは最初の５回程度の理解度の上昇がそれほど多くなく、そのまま最後までそれほど高くなることなく終わっている。30回読んだ結果としてはもう少し理解ができていて欲しいところである。この結果が額面通りに受け取ることができるなら、「読書百遍義自ら見る」という言葉は全ての人にあてはまるわけではないことになる。少なくとも10回程度でそれ以上はのびないことになる。コメントには「本を読む事は嫌いではない。逆に好きなくらいであるが、30回というとてつもない回数を読んだにも拘わらず、理解できたのは、ほんの一部にしかすぎなかった。」「この本を読んだ感想を一言で表すと難しい。その一言で尽きる。今までに読んだ本の中で最も難しいと言えるだろう。」等の感想がある。そこで本当に熱意をもって読んでいたかをコメントより検討した。しかしながらコメントを見る限りでは熱意がグループＢよりも低いとは思いにくい。逆にどちらかの言えば熱心に書いている。ただコメントの中に「疲れた」「眠い」という言葉が非常に多くでてくる。もう一つはしばらく（１、２週間）離れていて、また読みだす場合がかなりある。この場合学習曲線は上下を繰り返している。継続して、かつ集中して読むことが重要である。ところでこのグループの感想文から見た理解度が低いかというと必ずしもそうではない。少なくとも部分的には随分把握していると感じることが多い。例えば理解度が最下位のｅさんは「30回ずつ読み終えた今でさえ、全くと言っても過言ではないほど内容は理解することはできなかった。」と書いている。しかし一方「真理は一つしかない。」というデカルトの意見をもとに自らの

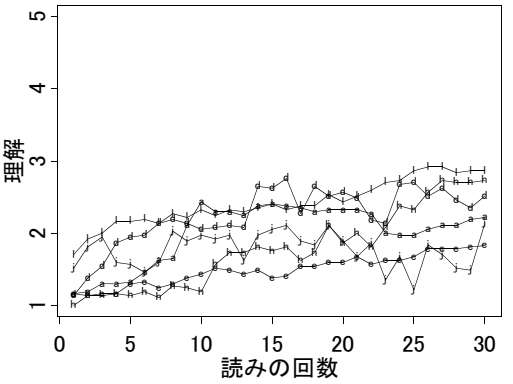

図４　学生毎の理解（グループＣ）

考えをデカルトのようにチェックできるか否かに関して「学識ある人でさえ難しいのに私などとてもできない。」と述べている。これはある程度理解しているということである。また 2 部で述べられている有名な 4 つの規則を引き合いに出し、自分の考えを述べている。だから部分的にはかなりの理解をしているということである。しかし e さんは「何回読んでも理解できるどころか、逆にもっともっと内容がわからなくなっているような気がする。」と述べている。その結果彼女は30回目の理解度が1.83という最低の点をつけることになったのかと思う。理解できているところがあっても理解できていないと感ずる部分が多い場合は理解の点数は低くつける傾向があるのだろう。このような人の場合もう少し読んでいけば一挙に上昇する可能性もあると思っている。このことについては 4 で再び議論する。

3.3　部・段落別の学習曲線

表 3　理解達成率の頻度分布（段落数）

理解達成率	5 回目	10回目	20回目
0－0.1	3	0	0
0.1－0.2	9	0	0
0.2－0.3	10	5	0
0.3－0.4	6	9	0
0.4－0.5	9	9	0
0.5－0.6	0	6	3
0.6－0.7	0	5	13
0.7－0.8	0	2	15
0.8－0.9	0	1	5
0.9－1.0	0	0	1

部毎の理解度は途中では異なっているが20回すぎるとほぼ同じになっている。第 4 部での振動が大きいのはこの部では最初の 2 段落だけを読みの対象としたからである。部毎ではなく、段落毎に見るともう少し差がでてくる。図 6 に37べての段落の学習曲線を示す。線がつぶれているが分布の幅は理解できると思う。段落にはいろいろの難易度があるが、だいたいこの程度におさまり、回数を増やすと理解が進むことがわかる。しかし詳しくみると学習曲線は段落ごとにかなり異なる。表 3 に理解達成率の段落数の頻度分布を示す。例えば 5 回目の理解達成率とは理解の最大値（多くは30目）と 1 回目の値の差に対する 5 回目と 1 回目との差の比である。達成率0.1－0.2で 5 回目が 9 とでているが、これは達成率が10％と20％の間に有る段が 9 個あることを示している。この表から 5 回読んだ段階では、達成率が10％に達しない段落から、50％まで達する段落があることがわかる。20回目でも理解達成率が50％程度のものがあることがわかる。これ

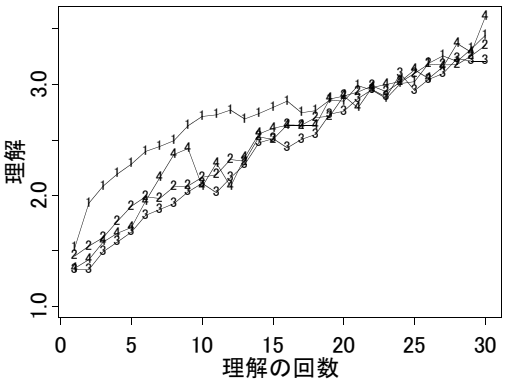

図 5　部毎の理解の進歩（1 － 4 部）

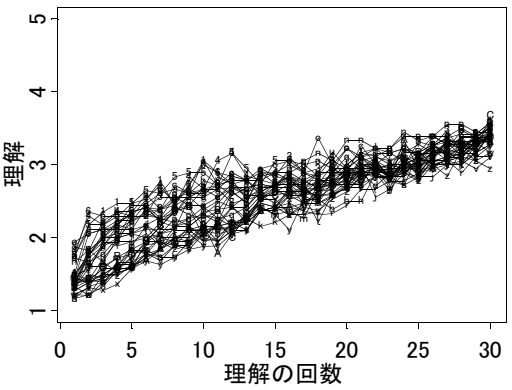

図 6　段落毎の理解の進歩（1 －37段落）

はあと10回で急速に伸びたことを示している。このような段落には１部４段９段、２部１段などがある。これらは２部１段の文章量が多いことを除けば事前には予想できなかったことである。次に有名な段について述べる。「良識はこの世のものでもっとも公平に配分されている。」がある段は１部１段である。ここは最終的に3.58であり、５回読んだ段階でも47％の達成率を示している。比較的理解されている段である。これは最初だから集中して読めているという面があるかもしれない。学生がよく問題にした「真なるべき意見はただ一つしかありえないにもかかわらず、」が載っている１部12段は最終的には理解率3.53で比較的高いが、５回読んだ段階では達成率は32パーセントである。４つの教則が述べられている２部７、８、９、10段は最終的には3.4から3.5の値になっている。しかし５回目では20－30％の達成率である。また真理がわかるまでの日常における指針（三、四の各率）について述べた第３部２、３、４、５段では最終の理解が3.11－3.37であり、５回目の達成率は10－25％になっている。最も有名な「私は考える、それ故に私は有る。」がある４部２段の最終理解率は3.67とかなり高い、しかし５回目では理解達成率は９％、10回目27％、15回目で53％、20回目69％と読めば読むほど理解が進んでいる。これらを見ると方法序説の大切な部分は５－10回程度では理解が難しいが30回まで読むとかなりの理解ができていることを示している。

3.4　読みと理解

この演習は方法序説を朗読することが主な、というより唯一行ったことである。図１でも見られるように理解と読み（スムーズに読めるか否か）の相関は極めて高い。ここでは個人別にいくつかの例を見る。図７はＡグループに属するｂさんの例である。この例では理解と読みが同期しているといってもよいぐらいである。このような例が多い。少し違うタイプもある図８もＡグループに属するｍさんの例だが、この場合は読みが向上してそのあとで理解がおいかける変化を示している。このようなタイプの人も多い。なお理解が先

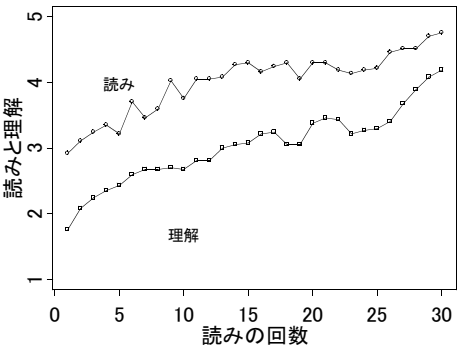

図７　学生の読みと理解（ｂ）

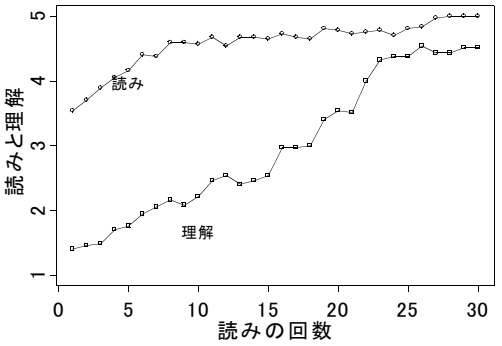

図８　学生の読みと理解（ｍ）

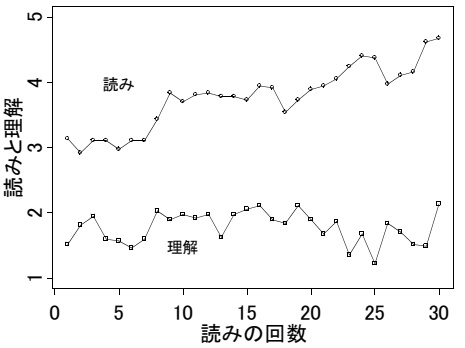

図９　学生の読みと理解（ｊ）

に上がり、その後読みがおいかけるタイプは無かった。また読みはあがるが、理解が進展しないタイプは唯一 j さんがそれであった。それを図 9 に示す。この場合もさらに読む回数を増やせば図 7 のように理解が追いかけていく可能性は否定できないと思われる。ほとんどの人の結果が示す読みと理解の同期または読みの先行は、この演習で行った、とりあえずスムーズに読めるようになることが理解を深める上で良い方法であること、もっと言えばスムーズに読める事無しに、理解することは不可能であることを示していると思われる。理解せよと言う指導は理解できない学生に対しては無理が生じることがあるが、よい朗読ができるようにという激励はそれほど無理な注文ではない。結果として理解に通じているのは、難しい本の読書の方法論としてはよい方法と言えるであろう。

3.5　感想文

さて読んだ最後にワープロ 3 枚程度の感想文を書いてもらった。この演習で得た感想文のできは、私が本学で得たもっともできのよい感想文である。30回も読むと流石に自分の言葉で書けるようである。レポート等で何らかの文献をコピーしたのではないかと思われる文章をよく見かけるがこの演習の場合そのような文章は 0 とは言えないまでもほとんど無かった。理解に関しては3.2で述べたので、ここでは方法序説を読んでどうだったかについての感想を 2 例紹介する。

例えば f さんは感想文の最後に「私は考えることが以前より随分多くなったと実感しています。自分の納得のいく判断が自分の中に生まれていることを実感しています。自信を持つことによって責任を持ち、責任を果たすことによって満足を得るということもここから読みとることができました。…これらの意見をこんなにもはっきりと示すことができたのはこの本と出会うことができたからではないかと私は思いました。今後の私の人生に大きく影響するであろうものをこういった形で得ることができるとは思いもしませんでした。」また o さんは「この「方法序説」という本は、何度同じところを読んでもなかなか理解できず、とても頭の痛くなる本でした。それほど私は、人間だけが持っているという「理性」という重要なものについて正しくもちいるどころかそれについて考えたこともなかったのだということがわかりました。しかし、いつまでもこのようなことでは、せっかく人間として生まれたけれどその価値がわからないまま過ごしてしまいそうです。人間は、理性を正しく用い真理を求めることによって、もっと素晴らしい生き方ができるのではないかということは、この本を読んで感じられました。そうなるように、これからは少しずつでも努力していこうと思いました。」このような感想文をもらす人がかなりいたので10年間この授業を行った。現在は学科の入門演習も別のものになり、また他の面でもできる条件が無くなったので休止している。

4　何故なんども読むと理解ができるか

この小論の結論は「読書百遍義自ら見る」は正しいということである。少なくとも30回を過ぎても向上していくようである。読み方は意味を無理に考える必要はない。スムーズに声を出して読めばよい。読む範囲は比較的長い部分を一度に読み、それを繰り返す方がよい。本当は 1 冊全部を何度も繰り返すのがよさそうだが、これは確かめたわけではない。このような仕事の課題としてどの程度の長さの部分を連続して読めばよいかを明らかにする必要があると考えている。そもそも何故

繰り返して読めば理解できるようになるのだろう。次に述べるのは一つの仮説である。理解したと感ずることができるのは全体像をもっており、それにもとづいて部分を位置づけることができる時である。この全体像を無意識で構築する上で何度も読むということが有効なのかもしれない。Cグループの人たちが部分の理解はできているのだが、全然理解できていないと感じたのはこの全体像の構築に時間がかかっているからではないか。グループを分ける要因はこの全体像の構築にかかる時間かもしれない。そうだとすると、さらに回数を重ねると、Cグループの人たちでも急速に向上しだす時点があるのではないかと思っている。Aグループのメンバーの何人かが10－20回台の中だるみのあとで、20回を過ぎてから進歩の度合いが急になっている。表2に示してあるが、Aグループの20回から30回からの理解の平均値の伸びは点数にして、1.14であり、Bグループの0.19やCグループの0.12を大きく上まっている。こらはそのような全体象が構築されたからではないか。

経験上短い部分を何度も読むだけでは理解が進まないのは短い部分の読みでは全体象の構築ができないためかと思われる。だから、その文献の全体像を伝える十分な長さの文章を読むということが必要なことのように思う。今後の仕事としてこのような仮説が正しいか否かを明らかにする必要があると考えている。

参考文献

1）方法序説、デカルト著、落合太郎訳、岩波文庫、1953年